

# 第82回日本公衆衛生学会総会・自由集会に参加して



茨城県土浦保健所  
所長 入江 ふじこ

秋が深まる10月31日から3日間、第82回日本公衆衛生学会総会が「実践と研究のシナジーが織りなす保健医療介護サービスの進化と調和」をメインテーマとして、茨城県つくば市のつくば国際会議場で開催されました。

今回の学会総会は現地参加を基本にオンデマンド配信を組み合わせて実施され、参加登録は3千名以上に上りました。

学会長の田宮菜奈子教授（筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野教授、ヘルスサービス開発研究センターセンター長）は、「公衆衛生とヘルスサービスリサーチ 30年の振り返りとこれから」と題して学会長講演をされ、公衆衛生の実践と研究活動を積み上げて来られた経験をもとに、ヘルスサービスリサーチとは、ヘルスケアサービスの提供と社会的影響に焦点を当てる多面的で学際的な研究であり、社会全体のヘルスケアサービスの質の向上に寄与することを目指す研究分野であると述べられました。また、大学は地域との連携が重要な役目であると考え、大学の研究室が早くから市町村と連携して医療介護レセプトの分析を進め、地元つくば市の高齢者福祉計画の策定にも携わっていることなどが紹介されました。国民のニーズに合った公衆衛生を進めるには、各専門領域に特化したアプローチだけでは不十分で、地域の実践者や住民との対話と協力が不可欠で、関係者が繋がってシナジーを起こすことが大切であるというメッセージが心に残りました。

1日目午後には、地方衛生研究所研修フォーラム「地域保健法・感染症法等の改正及び新機構設立の目指すもの」が開催されました。厚労省や国立感染症研究所、保健所、地方衛生研究所の各立場の演者から、戦後最大の感染症危機とされる新型コロナウイルス感染症の経験を踏まえ、我が国の健康危機管理の課題、一連の

法改正や新機構設立により目指すべき姿について、発表がありました。次の感染症危機に備えて、各都道府県においても専門的人材育成や地方衛生研究所を核とする調査研究・情報収集機能の整備が求められていることを痛感しました。

1日目の「結核集団発生の対策に関する自由集会」では、岐阜県岐阜保健所と大阪市保健所から集団感染事例に関する講演がありました。岐阜保健所の高齢者施設における事例では、初発患者探知後の接触者調査で施設職員の結核患者が発見され、日頃の定期健康診断と精密検査の受診結果の把握が大変重要であることを改めて認識しました。大阪市保健所の外国生まれの小児を発端とした事例では、学校や学習塾において個人情報に配慮しつつ疫学調査を進めた経過が紹介され、学校に対する有症状時の受診勧奨を含めた啓発、医療従事者に向けた外国出生結核患者の増加に関する情報提供の必要性についても、理解が深まりました。昨今課題となっている高齢者施設や外国出生者の結核対策について、発生状況や対策の進め方を振り返り、情報共有する機会に恵まれ、大変時宜を得た有意義な自由集会となりました。

また、2日目の夕方には、つくば国際会議場エントランスホールで、東京ロイヤルフィルハーモニー管弦楽団とプロのソリスト、第82回日本公衆衛生学会総会記念「第九」合唱団により、パンデミックに第一線で尽力した医療、公衆衛生関係者と試練に耐えた市民が共に歌う、人類の連帯を呼びかけた「第九」特別演奏会が開催されました。聴衆と一体となった歓喜の歌は、大きな感動を巻き起こしました。

今回の学会総会の準備、運営にご尽力された関係者の皆様に、実行委員会の一人として心から感謝を申し上げます。🍷